

はじめに

研究の目的：キッコーマン株式会社の源流の一である千葉県野田・高梨家の史料を用い、近世における高梨家の江戸向け出荷醤油の商標を検証し、そこから江戸の人々の食文化の一端を明らかにする。

醤油醸造業：近世以降、商品として生産され、流通→江戸地廻り経済圏内の代表的な商品

明治初年、生産額が工業部門において第三位→重要な産業

問題の所在：高梨家の商標数の多さ

近世において、現在の商標権のような権利・法律は確立しておらず、醤油樽につけられるマーク・銘柄は、史料の中では「印」という言葉で記載されている

近世・近代を通じ、ヤマサ醤油をはじめ、茂木・高梨家以外の業者でこれほど多く銘柄をつくっていた醸造家はみられない→印の多さは茂木・高梨家の特徴の一つ

商標・印に関する先行研究：大島朋剛氏 酒造業・戦前期灘酒の研究

石川道子氏 近世期伊丹酒の類似酒の研究

→醤油に関して商標・印を正面から扱った研究は少ない

⇒高梨家ではなぜこれほど多くの印がつけられたのか、各印の違いは何か

1 高梨家の商標

高梨家：近世において代々下総国上花輪村の名主を務める

1661(寛文元)年 醤油醸造を開始

1776(安永5)年 江戸に向け出荷を開始 「宝」「入高」「カネカ」の3種類

文化年間～天保年間(1804～1844)年 平均35種類ほどの印を出荷 最大で60種類の年も

明治初年 印数は15種類前後

1844(天保15)年 高梨家江戸向け出荷醤油

印数→30種類

出荷先江戸問屋→27軒 一軒の間屋につき平均で3・4種類の印を扱う

一種類の印のみを扱う問屋もあれば、最大で6種類の印を仕入れる問屋も

「上十」印…最上醤油に認定、他の印より高価格、高梨家の看板商品

天保15年にこの「上十」を仕入れている問屋は27軒中20軒

「寶」印…天保15年にこの「寶」を仕入れている問屋は27軒中18軒

特定の間屋にのみ売られていた印…30種類中21種類

高梨家では、「上十」「寶」のように広く販売する印の他に、問屋オリジナルともいえる、その問屋だけに販売する印をつくっていた

2 商標の違い

これら多数の印は何が違うのか

醤油のつくり方 大豆+小麦→麴 +塩水→諸味→(攪拌・発酵)→(絞)→生醤油

↓

醤油 ← (火入れ)

- ・「醤油には原料の大豆・小麦・塩の質と量の違いにより、上・中・下・上々の四種類がある」
- ・「一年諸味は香りよし、二年諸味は味よし、三年諸味は色よし」→**諸味を発酵させる期間の違い**
「しょうゆの醸造期間は一般に1年から1年半といわれてきたが、一族の造家は2年物、3年物もつくっており、「これら熟成期間の異なる諸味のブレンド比率を変えることによって多彩な商品を開発することが可能」

しかし

異なる印であっても価格が同じこともある 印は大まかに3～5段階ほどの価格帯に分かれる

1844(天保15)年送分帳1月の項目

日ごとの記載 12種類・1019樽→月末集計の記載 5種類 1019樽

↓

高梨家の醤油の中には、中味・品質は同じであっても異なる印のラベルを貼り、出荷している商品もあったのではないかと

3 多ブランド化の理由

何故、高梨家は中味・品質が同じであっても異なる印で商品を販売したのか

- ・「江戸市場が成熟に向かう江戸末期からとくに顕著に、しょうゆ問屋は『自分の店だけで売り捌くブランド』の開発を造家に求めるようになり、一族の造家は積極的にこの要望に応えた」
- ・1904(明治37)年 「醤油注文及び店印デザインにつき」(高梨家文書 5AKF1)
「尚々上万之儀当地近清殿にて揚ヶ居り品さし合ニ相成候間上万ノ口亀甲菊ト相改メ弊店ノ手印ニ相願度候右印拜見あしく候は何カ良き印御考之上弊店手印ニ致し度其ノ外フンドウ翁ハ別口ニ売捌き人有之候間右印ハ当地へハ弊店ノ外御遣し無之様願上候」
- ・1914(大正3)年「清水屋印 醤油注文及びレーベルデザイン見本」(高梨家文書 5AKF2)
「陳ば今回御迷惑様とは存候得共別紙封入のひきふ正印をフンドウ清水・フンドウ翁印中味にて参拾樽御注文申上候間何卒新印として特に具合よろしき物至急御送附相成度」

問屋・小売は高梨家に対して、自分の店でしか買えない印 —しかし中味は他店で売っている商品と同じ場合もある醤油— の販売を求め、また、問屋・小売はラベルが違っても中味は同じであることを認識していた

おわりに・今後の課題

ラベルが中味を保証しないのであれば、ラベルが保証するものは何か

→高梨家とのつながり・信用?問屋の商品の保管・品質保持力?

小売や個人は、あちこちの店で多数の印の醤油が売られていることをどのように感じていたのか

→選ぶ楽しみ?

広屋儀兵衛家(ヤマサ醤油)は近世・近代を通じて「上」「次」を中心に数種類で販売を行う

→何らかのメリットがあったはず